

くりはらの大豆だより

令和5年度 第2号 令和5年8月7日発行

宮城県栗原農業改良普及センター

TEL 0228-22-9404

大豆栽培の今後の管理のポイント

- 中耕培土
- 湿害/干害対策
- 追肥
- 適期の病害虫防除

気象経過

- ・6月：梅雨入りは平年より1日早い6月11日で、6月16日に大雨があった影響もあり月降水量は平年と比較してかなり多くなりました。月を通して暖かい空気が流れ込み、築館の月平均気温が6月としては観測開始以来最も高くなりました。また、月日照時間は平年並みでした。
- ・7月：月を通して平均気温はかなり高く推移しました。梅雨明けは平年よりも6日早い7月22日で、月降水量は上旬・中旬ともに平年並みかやや少なくなり、日照時間は多くなりました。

生育状況

－生育量はタンレイ、ミヤギシロメともに前年より少ない－

◎生育調査ほ（7月24日調査）

- ・タンレイ、ミヤギシロメともに主茎長、主茎節数が前年に比べ少なくなっています。
- なお、タンレイでの調査ほは6月16日の大雨で1～2日間程度浸水しました。

表.1 生育調査結果（7月24日調査）

品種 地域		播種期	主茎長	主茎節数	分枝数	開花期
タンレイ 志波姫 刈敷	本年値	6/7	53 cm	11.5 節/本	1.8 本/本	7/27
	前年差	4日早	-8	-0.6	+0.3	前年 7/29
ミヤギシロメ 若柳 三田鳥	本年値	5/23	66 cm	12.5 節/本	1.2 本/本	7/26
	前年差	3日早	-8	-1.3	0.0	前年 8/5
	平年差	11日早	+9	+1.2	+0.3	平年 8/7

※タンレイは令和2年より生産者が変更となっているため、平年差はありません。

※平年差は過去5年の平均値との差です。

◎管内の概況

- ・6月16日の大雨の前に播種されたほ場では浸水等により生育の遅れやムラが見られます。また、6月16日以降の播種作業に遅れがありました。

今後の管理

中耕培土

- ・中耕培土は増収効果が大きいいため、未実施ほ場では**最低1回**実施しましょう。
- ・通常開花期の10日前までに終わることになっていますが、10日前以降であっても管理機が入れる大きさであれば実施しましょう。

追肥 – 中耕培土が優先 –

- ・大豆は開花期以降、乾物生産に多量の窒素を必要とするため、必要に応じて**最終培土期**（晩播栽培で8月上旬;本葉5~6葉期）に緩効性の被覆窒素肥料を窒素成分で**5kg/10a**施用しましょう。最終培土期に施用することで開花期から子実肥大期にかけて肥効を発現することが出来るとともに、作土の窒素濃度が急激に高まることを避けることができ根粒菌の活性低下を抑制することができます。
- ・湿害等により葉色が著しく淡い場合など生育が不良の場合には、生育を回復させるために、硫酸などの速効性肥料の施用が有効です。施肥量は窒素成分で**3kg/10a**程度となります。

湿害・干害対策

◎**湿害対策** – 降雨が続く場合に実施 –

子実が肥大する生育後期の土壌過湿は、根の呼吸阻害や根粒菌の活性低下を引き起こすことで窒素供給が抑制され、減収につながります。

- ・暗きよを開放して、地下排水を促しましょう。
- ・大雨の後や長雨のときは、排水溝が詰まっていないか、また明きよに水が溜まっていないかを確認し、必要に応じて修繕しましょう。

◎**干害対策** – 晴天が10日間以上続きそうな場合に実施 –

開花期以降は、それ以前の3~4倍の生育量となり、多量の水分を必要とします。不足すると落花、落莢、不稔莢が増加し、減収につながります。

- ・暗きよを閉じる等、水分保持に努めましょう。
- ・かん水が可能な場合は、畝間の土壌表面に水がしみ出す程度、ほ場に水分を補給しましょう。

◎病虫害防除のポイント –品種や連作状況に合わせ、以下の防除を優先–

- ・ミヤギシロメ/タチナガハ…マメシクイガ等のチョウ目幼虫
- ・タンレイ…紫斑病、マメシクイガ

(特に連作ほ場で被害が大きくなる傾向あるので注意が必要)

食葉性害虫

タバコガ類 (ツメクサガ、オオタバコガ)



・開花開始頃にピークを迎える。品種によって差があり「ミヤギシロメ」で発生が多くなる傾向があります。

・中齢幼虫期以降は莢に移動して加害することから、被害が大きくなり防除効果も低下する傾向があります。散布時期を逸しないように病虫害発生速報を確認して適期防除を実施しましょう。

吸汁性害虫

ジャガイモヒゲナガアブラムシ



・被害を出来る限り抑えるため、発生盛期となる8月下旬～9月上旬よりも前に防除を実施しましょう。

・被害が急速に拡大するため、殺虫効果が高く即効性の薬剤を使用しましょう。

・葉裏に寄生しているので、薬液は葉裏によくかかるように散布しましょう。

子実害虫

マメシクイガ



・1回目:8月下旬、2回目:1回目の7～10日後に防除しましょう。

・日長に反応して羽化するため発生時期は毎年ほぼ同じであり、管内では8月から9月初旬が発生盛期となります。

・大豆の連作4年以上のほ場では被害が多発する恐れがあるため、効果の高い殺虫剤を選択しましょう。

フタスジヒメハムシ



・若莢の表面を食害し、そこから雑菌が侵入して汚粒の原因となります。

・第2世代成虫の発生盛期（8月下旬～9月上旬）の防除が有効となります。

・散布時期が遅れると効果が劣り第2世代成虫の発生時期は年次変動があるため、病虫害発生速報を確認しましょう。